大都市における
地域資料サービスの未来

令和6年度東京都図書館協会講演会
2024年8月29日

福島幸宏
慶應義塾大学文学部准教授／東京大学大学院情報学環客員准教授
fukusima-y@keio.jp
https://researchmap.jp/fukusima-y/

1

1

自己紹介

- 学生・院生時代は日本近現代史を専攻
  - 高知県出身・島根大学・京都府立大学大学院・大阪市立大学大学院
  - 神社史、地域社会に関心／自治体史調査・フィールドの調査を経験
- MLAの職員・研究者として
  - 京都府立総合資料館歴史資料課／庶務課　2005年4月～2015年3月
  - 京都府立図書館企画調整課　2015年4月～2019年3月
  - 東京大学大学院情報学環特任准教授　2019年4月～2021年3月
  - 慶應義塾大学文学部准教授 ／東京大学大学院情報学環客員准教授　2021年4月～
- 京都府職員として関わったこと
  - 京都府行政文書（重要文化財）の管理運用 → 20世紀以降の紙資料で初の重文指定
  - 戦時期・戦後の行政文書の公開 → 京都の戦時期／占領期研究の進展
  - 文化庁 指定文化財（美術工芸品）企画・展示セミナー修了 → 学芸員としての中核的な研修
  - 「京都市明細図」の公開 → 京都の街歩き事業の基盤に
  - 「東寺百合文書（国宝）」のweb公開 → CC BYで公開／Library of the Year 2014大賞受賞／ユネスコ「世界の記憶」に
  - 京都府立図書館サービス計画策定 → 図書館協議会の設置／図書館の評価基準を検討
  - 都道府県図書館の横断検索システムの超高速化 → カーリルのシステムを導入
  - デジタルアーカイブの連携に関する関係省庁等連絡会・実務者協議会
    メタデータのオープン化等検討ワーキンググループ構成員 → ジャパンサーチへ
  - 京都府立図書館貴重書コレクションの構築 → IIIF+DOI+CC0 の組み合わせは国内初
- 現在
  - 慶應義塾大学文学部准教授／東京大学大学院情報学環客員准教授
  - これからの学術情報システム構築検討委員会委員／文化審議会博物館部会 博物館DXに関する有識者検討会に係る委員（2022年度） など
  - 日本歴史学協会常任委員／デジタルアーカイブ学会理事／日本アーカイブズ学会委員 など
  - MLA（博物館・図書館・公文書館）を軸に知識情報基盤・デジタルアーカイブについて検討

2

2

広報資料から

- 情報通信環境が短期間で進化する現代に沿って「地域資料」を捉えなおすとともに、大都市であり、日本の首都という性格を持つ「東京」という地域だからこその「地域資料サービス」には、どのようなものが考えうるか、今後取り組むべき地域資料サービスのあり方についてお話いただきます。
- 地域資料サービスは公共図書館が主として語られがちですが、多種多様な大学図書館、専門図書館、学校図書館などがあり、その所蔵資料が幅広いことも大都市「東京」ならでは。
- 公共、大学、専門、学校と各館種に期待することなどについてもお話いただきます。

- 情報通信環境の変化
- 地域資料
- 東京
- 公立・大学・専門・学校の各館種

3

3

図書館の“拡大”を支えた社会状況の変化

- 社会構造の変化
  - 地域自体の生き残り事態に苦闘する状況（林ほか編(2010)）（小山(2015)）
  - 900あまりの自治体の消滅・地方の無人化と都市の高齢化（増田(2014)）
  - 戦後の日本社会を支えてきた構造（「慣習の束」）の不可逆の変化を指摘（小熊(2019)）
  - 今後は“縮小社会”を前提に：これまでは経済成長を背景に仕組みを拡充
- 資料認識の深化
  - マンガ・動画資料：映画／テレビ／動画
  - 空間自体の情報化：建築／地域／地球／宇宙空間
  - 人間の情報行動
- 災害の多発
  - 阪神淡路大震災・東日本大震災の衝撃：地域自体の消滅を改めて経験
  - 復興過程における地域資料の重要性の指摘
  - 「平常時の課題」の指摘：自治体史収録資料でも流出・消滅の危機にある
- 地域の情報プールの消滅＋対象の認識の拡大＋棄損の危機の再認識

4

4

本日の構成

- １ 情報通信環境の変化
- ２ 地域資料の捉え方
- ３ 東京という巨大都市
- ４ おわりに

5

１ 情報通信環境の変化

6

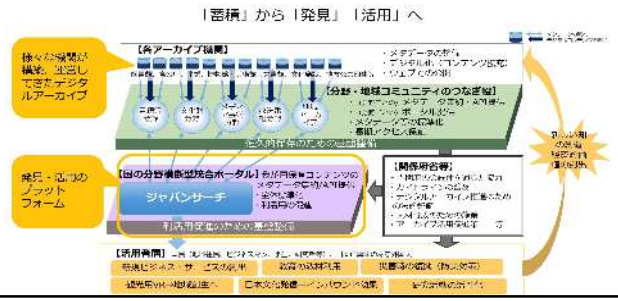
「個人向けデジタル化資料送信サービス」の衝撃

- 国会図書館デジタルコレクションの新機能
  - 図書館送信対象資料の多くが個々人の手許まで
  - 国会図書館のIDがあれば、約264万点の資料がいつでもアクセス可能に
  - 特に雑誌（除商業雑誌）の調査に威力
  - これらの資料については全文テキスト検索も可能
- さらにオンライン資料（電子書籍・電子雑誌）の収集範囲拡大
  - 有償やDRM（技術的制限手段）付き資料も、2023年１月から収集開始
    - https://www.ndl.go.jp/jp/news/fy2022/220526_01.html
- 国会図書館が日本語書籍の事実上のプラットフォームに
  - 学術情報系のプラットフォームやKindleなどの商用プラットフォームと組み合わせれば、かなりの書籍・雑誌情報へのアクセスが可能に
  - では、個々の図書館は今後どのような戦略を取るべきか？

7

所与の条件としてのジャパンサーチ

- 2020年8月に正式公開された「我が国の幅広い分野のデジタルアーカイブと連携し、多様なコンテンツをまとめて検索・閲覧・活用できるプラットフォーム」
- ここへの対応を行えば、他の様々な統合システムへのデータ連携が容易に
- 今後は、地域や分野の「つなぎ役」の充実が重要に



8

オープンデータ

- オープンデータの定義
  - 「オープンデータ基本指針」（高度情報通信ネットワーク社会推進戦略本部・官民データ活用推進戦略会議決定：2017年5月30日）
  - 二次利用が可能な利用ルールで公開
  - 機械判読に適したデータ形式
  - 無償で利用できるもの
- キーワード
  - 二次利用
  - オープンデータの5つ星
  - クリエイティブ・コモンズ・ライセンス
  - 機械判読
- 即時オープンアクセスの議論へ

オープンデータのための5つ星スキーム
https://5stardata.info/ja/

9

9

周辺環境の変化

- 2020年2月からいままでのコロナ禍での状況
  - 一時期は日本の公立図書館の88%が閉館／大学図書館もほとんどが閉館
  - 学校教育・社会教育・調査研究に大きなダメージ
  - 一方、電子書籍の一定の普及 → 図書館運営の議論がもっとあってもよい？
- この間の諸制度の変化
  - 図書館：国会図書館による絶版等資料の個人送信の開始
  - 博物館：博物館法が制定以来の大幅な改訂：デジタルアーカイブが博物館の業務に
  - 公文書：国の公文書の正本は原則デジタルに

10

10

2 地域資料の捉え方

11

11

現在の焦点：対象コンテンツの拡大

- 動画資料
  - 映画／テレビ／動画
- ボーンデジタルの論文・書籍・情報
  - 電子ジャーナル／電子書籍／統計資料
- 空間自体の情報化
  - 建築／地域／地球／宇宙空間
  - 東京都デジタルツイン実現プロジェクト（2021） → GovTech東京（2023）
- 人間の情報行動の集積
  - 位置情報
  - 情報収集行動
- →文化遺産のデジタル化という出発点からくる、ボーンデジタル資料やデータ類へのアプローチの弱さをどう位置づけるか

12

12

現在の焦点：写真のカラー化／カラー写真の「発見」

- 沖縄県公文書館の「写真が語る沖縄」
  - NARAからの収集写真、地方写真、県所蔵写真などを横断で検索
- 北摂アーカイブスの活動
  - 大阪府豊中市と箕面市の共同運営（実質は「地域フォトエディター」による）
- 白黒写真のカラー化（庭田・渡邉(2020)）
  - 自動着色＋聞き取りによる補正＋新たな写真の発掘など
- 占領期写真の収集
  - 衣川太一（写真収集家／神戸映画資料館）によるオークション収集
  - 展示「戦後京都の「色」はアメリカにあった！」（植田ほか編(2023)）
- 肖像権ガイドラインの公開
  - デジタルアーカイブ学会（2021年4月19日）

13

13

テキスト技術をめぐって

- くずし字認識
  - 国書データベース等によるデータ集積：画像認識技術＋学習データ
  - くずし字認識アプリ「みを(Miwo)」などの開発
  - 学習データの拡充が課題：版本等に留まっている側面も
- テキストの構造化
  - TEI(Text Encoding Initiative)：テキストの構造とメタ情報を記述
  - 近世ヨーロッパ史における帳簿分析／延喜式への応用（小風・後藤2019）
- 市民参加型
  - 江戸料理レシピデータセット
    - 古典籍からレシピをオープンデータで公開：クックパッドとの連携
  - みんなで翻刻
    - クラウドソーシングによる史料翻刻の推進
    - 2017年に京都大学古地震研究会で開始。
      その後国立歴史民俗博物館、東京大学地震研究所が参加
    - 現在、3800万文字を突破 → 福井県文書館の参加
- 災害研究の深化（加納ほか2021）
  - 限られた古記録から大量の資料を対象に
  - 史料批判の手続き

14

14

画像・3Dデータの現状

- IIIF(International Image Interoperability Framework)
  - 画像へのアクセスを標準化し相互運用性を確保する仕組み
  - デジタルアーカイブでの画像公開の条件になりつつある
- フォトグラメトリ
  - 大量の写真を組み合わせることで3Dデータを作成：比較的簡易な環境で可能
  - ノートルダム大聖堂のデジタル的な復元
  - フランス国立図書館リシュリュー館の天井画
- 石造物3Dアーカイブ
- 3次元計測データの作成・運用
  - 考古学分野における実践（野口2022）
  - Extended Reality／Cross Realityの世界へ：XRミートアップ奈良 文化財 × XR

15

15

市民による活動：高知県の事例

- 四万十町地名辞典
  - 歴史文化情報を公開
  - 高知県河川台帳から情報をCSV化、PDF化してオープンデータで公開
  - 地域資源地図の作成
- 高知地域資料保存ネットワーク
  - GISによる「可視化」で資料のフォローができるデータベースを構築
  - 災害時の資料レスキューのトリアージ
  - 学校資料の保全にも
- 市民科学による地域文化資源の「記録」
  - このような活動とどう連携を作るか？

16

16

2010年代以降の状況

- アーカイブ／デジタルアーカイブの試みの〈氾濫〉
  - 1995と2011のインパクト：被災写真資料への注目／アーカイブに「現在を記録する」意味が
- 現在に繋がるデジタルアーカイブの考え方の確立
  - 東寺百合文書WEBの登場（福島(2014)）：国宝資料の一挙公開／ダウンロード可／CC BYによる利用
  - 利活用への大きなシフト（古賀(2017)）
  - 現在も各地での構築が日々行われている
- デジタルヒューマニティーズの展開
  - 歴史学分野での進展（後藤・橋本(2019)）により理論的・実践的に一定のまとまりが見えている段階
- 統合／横断の動き
  - 組織内：京の記憶アーカイブ（2015）／東京大学学術資産等アーカイブズポータル（2019）／Keio Object Hub（2021）
  - 組織外：越後佐渡デジタルライブラリー（2011）／群馬県立図書館デジタルライブラリー（2021）
- →基盤技術の変化や制度整備を背景に、1990年代の構想が実現し得る状況に

17

17

「個人」と出会う

18

18

3 東京という巨大都市

19

19

都市構造の把握

- 微分化の方向
  - 近世都市研究に淵源
  - 三都の分析から出発／複雑な権利関係と社会集団の重層
  - 近代にも持ち越される
    ：近代化／震災／戦災／高度成長／バブル で大きな変容がある
  - 流入する人々と小集団の形成：同郷／信仰集団／同窓／サークル…
  - 多摩や島嶼部をはじめ、区部でも社会集団の重層は指摘できる
  - →ということは？
- 都市全体の把握
  - ひとともの流通
  - メディアの存在による「都市意識の形成」
  - 複数の情報発信の主体や拠点

20

20

学校資料の蓄積

- 学校資料研究会
  - 2017年から活動／関西の有志（学芸員・大学教員など）／初等中等教育を念頭
  - 学校資料とは、学校に関するあらゆる資料のことです。学校にある（あった）ものに限らず、個人が所有する（していた）ものも含みます。
  - 学校資料は、文書や公文書類、写真、教科書、考古資料、民俗資料、美術工芸品、教材教具、標本、児童・生徒の作品、P.T.A.や部活動に関するものまで、実に幅広いバリエーションがあります。
  - 村野正景・和崎光太郎編『みんなで活かせる！学校資料――学校資料活用ハンドブック』（2019年3月発行、本文、正誤表）
  - 『学校資料Q&A』（本文）
- 全国大学史資料協議会
  - 1996年結成／97機関が加盟
  - 大学の歴史は個別大学史の枠にとどまるものではなく、他大学や社会との関連を視野に入れて編纂されるべきであり、大学に蓄積された資料は、（略）広く社会に公開・利用されるべきであると考えます。

21

21

芸術活動とその資料

- ドーナツプロジェクト（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館）の活動
  - 舞台芸術のアーカイブを「ドーナツ」と形容／演劇やダンスやパフォーマンスは、ドーナツホール／公演映像、戯曲、ポスターやフライヤー、チケット、衣装、舞台装置図、舞台写真、劇評など、その舞台に関連する資料をできる限り多く収集することで厚みのあるドーナツを
  - デジタル・アーカイブの構築と利活用を担うアートマネジメント人材の育成を目的とする連続講座がドーナツプロジェクト（文化庁「大学における文化芸術推進事業」「舞台公演記録のアーカイブ化のためのモデル形成事業」）
- 小劇場
  - 大都市独特の
  - 自らアーカイブ形成を指向する／指向しない
  - 情報の蓄積を忌避する面も
- タウン誌／エフェメラ
  - 『週刊きちじょうじ』どの地域にもあった（ある）存在
  - 京都府時代の「苦い」経験

22

22

市民運動資料／コミュニティミュージアム的役割

- 市民アーカイブ多摩
  - 市民活動資料の蓄積
  - 市民活動資料には、団体が発行した会報やミニコミからチラシ、ビラ、ウェブ上の文書など
  - 草の根の市民の知恵や潜勢力によって支えられ創造されていることを気づかせてくれる、大切な源泉／「失敗」の記録から学ぶ
  - 専門の公的機関は存在しない／団体解散や担い手の高齢化によって散逸の危機
- 戦災資料
  - 東京大空襲・戦災資料センター／2002年開館
  - 東京の空襲の歴史・体験を、大きな枠組みも意識しながら、できるだけ正確にしっかり伝えていく。それを通じて、戦争や空襲の記憶の風化をふせぎ、過去の戦争を美化・正当化するような動きには反対し、戦争・空襲のない平和な社会をつくり、まもっていく
- コミュニティミュージアム
  - 多文化サービスと接続
  - アイデンティティの確保／社会の多様性の担保　例）高麗博物館

23

23

4　おわりに

24

24

図書館の役割は？

- 古典的な結論

- 「責任範囲」の情報と資料の所在
  - 把握する／常に更新する
  - 案内できる／連絡をつけられる

- ラストリゾートとしての役割
  - すべてを直接引き受ける必要はない
  - 博物館など関係各所と協議しながら
  - デジタルでの代替の積極活用 → 環境整備が重要

25

25

望ましい社会にむかって

- 資料保存機関をめぐる近年の状況
  - 象徴的には文化財保護法の大改訂：活用重視・観光や地域振興との連動が明確に
  - 市区町村レベルでの脆弱な基盤の露呈と文化財部門の専門分野の偏りの指摘（岩﨑 2019）
  - 〈保守的〉にならざるを得ない公立図書館・大学図書館の状況

- 公的な情報へのアクセスの機会均等
  - 社会がいままで生み出してきたものの継承
  - 今行われている活動・投資の効率化
  - このために貢献するのがデジタルアーカイブの存在意義
  - 必要な情報を必要としている場所に届ける、という社会成立のための重要な要件をデジタル環境下で遂行する
  - 公的／情報／アクセス それぞれを考え抜く

26

26

参考文献

- 相宗, 大督. (2020). 記憶から記録へ: 大阪市立図書館における「思い出のこし」事業. ライブラリー・リソース・ガイド, 31.
- 植田, 憲司., 衣川, 太一., 佐藤, 洋一. (編). (2023). 増補新版 戦後京都の「色」はアメリカにあった!: カラー写真が描く〈オキュパイド・ジャパン〉とその後. 小さ子社.
- 大井, 将生., & 渡邊, 英徳. (2020). ジャパンサーチを活用した小中高でのキュレーション授業デザイン: デジタルアーカイブの教育活用意義と可能性. デジタルアーカイブ学会誌, 4(4).
- 小熊, 英二. (2019). 日本社会のしくみ: 雇用・教育・福祉の歴史社会学. 講談社現代新書.
- 佐藤, 洋一., & 衣川, 太一. (2023). 占領期カラー写真を読む―オキュパイド・ジャパンの色. 岩波新書.
- 国立大学図書館協会. (2019). 大学図書館におけるデジタルアーカイブの利活用に向けて. 国立大学図書館協議会.
- 国立国会図書館. (2010). 文化・学術機関におけるデジタルアーカイブ等の運営に関する調査研究. 国立国会図書館.
- 是住, 久美子. (2015). ライブラリアンによるWikipedia Townへの支援. Retrieved from http://current.ndl.go.jp/ca1847
- 澤谷, 晃子. (2018). 大阪市立図書館デジタルアーカイブのオープンデータの利活用促進に向けた取り組み. Retrieved from http://current.ndl.go.jp/ca1925
- 次世代文化施設フォーラム. (2023). 博物館・図書館等を基盤とした地域文化資源の保全と活用を求める政策提言―文化資源の「地域包括シェア」をめざして―. Retrieved from https://drive.google.com/file/d/1wTfYfpMdob2iMhLPHi6NXaavAvZfCCOtU/edit
- 嶋田, 学. (2019). 図書館・まち育て・デモクラシー: 瀬戸内市民図書館で考えたこと. 青弓社.
- 田中, 輝美. (2021). 関係人口の社会学: 人口減少時代の地域再生. 大阪大学出版会.
- 庭田, 杏珠., & 渡邊, 英徳. (2020). AIとカラー化した写真でよみがえる戦前・戦争. 光文社.
- 野口, 淳. (2022). 文化機関における3次元計測・記録データの管理・公開の意義と課題. カレントアウェアネス, (351). Retrieved from https://current.ndl.go.jp/ca2017
- 蛭田, 廣一. (2019). 地方資料サービスの実践. 日本図書館協会.
- 蛭田, 廣一. (編). (2021a). 地域資料サービスの展開. 日本図書館協会.
- 蛭田, 廣一. (編). (2021b). 地域資料のアーカイブ戦略. 日本図書館協会.
- 平川, 千宏. (2020). 市民活動 資料の保存と公開: 草の根の資料を活用するために. 日外アソシエーツ.
- 福島, 幸宏. (2011). 地域拠点の形成と意義. In デジタル文化資源の活用―地域の記憶とアーカイブ (勉誠出版).
- 福島, 幸宏. (2014). 京都府立総合資料館による東寺百合文書のWEB公開とその反響. Retrieved from http://current.ndl.go.jp/e1561
- 福島, 幸宏. (2016). ガイドラインに委れるべき要件（福島構成員資料）. Retrieved from http://www.kantei.go.jp/jp/singi/titeki2/digitalarchive_kyougikai/meta_data/dai2/siryou3_3.pdf
- 福島, 幸宏. (2017). ウィキペディアタウンをMLAの立場から考える. Retrieved from http://magazine-k.jp/2017/07/11/wikipediatown-for-mla/
- 福島, 幸宏. (2018). これからの図書館員像: 情報の専門家／地域の専門家として. 現代思想, 46-18.
- 福島, 幸宏., & 天野, 絵里子. (2019). アーカイブズ構築のスリムモデル. (Code4Libジャパン2019報告資料).
- 福島, 幸宏. (2020). 図書館機能の再定置. ライブラリー・リソース・ガイド, 31.
- 福島, 幸宏. (2021a). 図書館の未来像のひとつとしての地域資料活用. 図書館界, 72(5).
- 福島, 幸宏. (2021b). 地域の博物館や図書館などは「地方写真」の拠点たりえるか?. 国立民族学博物館研究報告, 46(1).
- 福島, 幸宏. (2021c). 地域資料の可能性. 図書館雑誌, 115(9).
- 福島, 幸宏. (2022). 歴史学の変革は如何にして可能か―デジタル技術との関係から考える―. 洛北史学, 24.
- 福島幸宏（責任編集）(2023). ひらかれる公共資料：「デジタル公共文書」という問題提起. 勉誠社.
- スー・マケミッシュ, マイケル・ビゴット, バーバラ・リード, & フランク・アップウォード編 (2019). アーカイブズ論：記録のちからと現代社会. 安藤正人, 石原一則, 坂口貴弘, 塚田治郎, 保坂裕興, & 森本祥子訳. 明石書店.
- スー・マケミッシュ, マイケル・ビゴット, バーバラ・リード, & フランク・アップウォード編 (2023). 続・アーカイブズ論：記録のしくみと情報社会. 安藤正人, 石原一則, 大木悠佑, 坂口貴弘, 塚田治郎, 平野泉, 保坂裕興, & 森本祥子訳. 明石書店.
- 増田, 寛也. (2014). 地方消滅. 中公新書.

27

27